

イエズス会宣教師の書翰・報告書に基づく 16 世紀中葉の 真言宗について

徳重弘志

はじめに

いくつかの先行研究で指摘されているように、イエズス会の宣教師達は、16・17世紀における真言宗の様相に言及した書翰・報告書を、西洋社会に向けて送っている。例えば、水戸 [1992a] や山本 [2011] は、幾人かのイエズス会宣教師の書翰・報告書を対象として、真言宗と関連する記述の指摘を行っている。これらの日本における先行研究は、いずれも当時の真言宗に関する多くの知見を与えてくれるが、宣教師達の書翰・報告書の原文を提示せず、和訳のみを引用しているという問題点を抱えている。さらに、先行研究が依拠している和訳（松田 [1997] [1998] や、村上・柳谷 [1968] [1969] など）は、1598年にポルトガルのエヴォラ市で刊行された『エヴォラ版日本書翰集』に基づいて翻訳されており、他の写本・版本における異読にはほぼ言及していない¹。

さて近年では、イエズス会宣教師の書翰・報告書に関して、複数の写本・版本に基づく校訂テキストを利用することができる。RUIZ DE MEDINA は、1547年から1563年にわたる合計199点の書翰・報告書を対象として、正確な校訂テキストを刊行している。また、東京大学史料編纂所は、1547年から1561年にかけて執筆された合計149点の書翰・報告書を対象として、信頼のできる校訂テキストと、それに基づく和訳とを刊行している。

本稿では、ルイス・フロイス (Luis Fróis, 1532–1597) の来日 (1563年) よりも時代的に先行する史料、すなわち、イエズス会宣教師が1548年から1562年にかけて執筆した書翰・報告書を対象として、16世紀中葉の真言宗について以下の三つの観点から検討を行う。第一に、調査すべき語句を把握するために、イエズス会によって1603・1604年に刊行された長崎版『日葡辞書』を対象として、「真言宗と関連する用語」の特定を行う。第二に、真言宗について直接的に言及する書翰・報告書を特定した上で、当該箇所の原文と和訳とを年代順に提示する。第三に、真言宗について間接的に言及する書翰・報告書の存在を指摘し、当該箇所の原文と和訳とを提示した上で、真言宗と関連すると見做した根拠について説明を行う。

1 『日葡辞書』における「真言宗と関連する用語」

長崎版『日葡辞書』(*Vocabulário da Língua de Iapam: com a declaração em Português*)には、本篇(1603年)と補遺篇(1604年)とが存在し、全体で約33,000語の「見出し語」が収録されている。なお、補遺篇には、ある語を補足したり、ある意味を増補したりするために、6,975語が収められている²。また、同辞書には、現代日本語訳(土井ほか[1980])と、その索引(森田[1989])とが存在するので、本稿では原書ではなくそれらを利用した。

さて、『日葡辞書』における仏教用語には、説明文中に「仏法語」(*Buppô*)という注記が含まれるものと、含まれないものが存在する。そして、この注記が説明文中に含まれている「見出し語」(175語)については、森田[1989: 295–296]によって整理されている。ここで問題となるのは、同辞書における仏教用語の多くには、説明文中に「仏法語」(*Buppô*)という注記が含まれていないということである。また、管見のおよぶ限りでは、『日葡辞書』における仏教用語を網羅的に整理した先行研究は存在していない。そこで本稿では、『日葡辞書』を対象として、「真言宗と関連する用語」の特定と整理を試みた。

1.1 真言宗と関連することが明記されている用語

土井ほか [1980] ³	見出し語	対応する漢字	説明文(一部抜粋)
p. 21 l	Aji	阿字	真言宗(<i>Xingonxüs</i> ⁴)の或る題目についての観念・瞑想.
p. 21 l	†Ajiquan ⁵	阿字観	<i>Xingonjü</i> (真言宗)と呼ばれる宗派の人々が唱導するある学問.
p. 79 l	Cagi	加持	真言宗(<i>Xingöjü</i>)という宗派の異教徒流の或る儀式, すなわち, 祈禱.
p. 79 l	Cagimon	加持門	真言宗(<i>Xingöjü</i>)という宗派のある儀式, すなわち, 祈禱.
p. 157 r	Cöya fijiri	高野聖	荷物包みを背負い, 寄付を乞いながら遍歴する, 高野(Cöya)の僧院の坊主(<i>Bözös</i>). ⁶
p. 165 l	†Cujigoxinbö ⁷	九字護身法	真言宗(<i>Xingonjü</i>)の坊主(<i>Bonzös</i>)がイドロ(<i>Idolo</i> 偶像)〔仏像〕の前で行なうある儀式.
p. 216 r	Faxxü	八宗	日本にある八つの宗派. すなわち, Fassö, sanron, cuxa, jöjit, rixü, qegon, tendai, xingon. (法相, 三論, 俱舍, 成実, 律宗, 華嚴, 天台, 真言)
p. 306 r	Goma	護摩	真言宗僧(<i>Xingonjüs</i>)が悪魔に対して祈禱しながら行なうある種の儀式.

p. 518 r	Quangiö	灌頂	真言宗徒 (<i>Xingōxūs</i> ⁸) が, ある坊主 (<i>Bonzo</i>) に位を授ける際に行なう儀式で, 坊主の頭に水を注ぎかけ, ある冠をかぶせる儀式.
p. 770 l	Xingon	真言	大日 (<i>Dainichi</i>) を信仰する真言宗徒 (<i>Xingonxus</i>) の宗派.

1.2 真言宗と関連する可能性がある用語

土井ほか [1980]	見出し語	対応する漢字	説明文 (一部抜粋)
p. 58 l	Biruxana	毘盧遮那	ある仏 (<i>Fotoqe</i>) の名前. ⁹
p. 125 r	Chôbucu	調伏	ある人に呪いをかけたり, 悪魔をとりつかせたりして, その人がついには病気にかかり, 死んでしまうようにするための祈禱.
p. 272 l	Fudô	不動	¶また, <i>Fudô</i> . (不動) ある仏 (<i>Fotoque</i>) の名. ¹⁰
p. 304 l	Gochi	五智	仏 (<i>Fotoque</i>) に具わっている五種の智慧. ¹¹
p. 306 r	†Gomadō	護摩堂	或る様式の礼拝堂, または, 祭壇であって, その中で或る儀式を行ないながら, <i>Gomagui</i> (護摩木) と称する木を焚く所. ¹²
p. 307 l	†Gomagui	護摩木	迷信的な行事としてイドロ (<i>Idolo</i> 偶像) [仏像] の前で焚かれる或る木. ¹³
p. 383 l	Mandara ¹⁴	曼荼羅	肖像, あるいは, 何か物を描いた絵.
p. 402 r	Micqeô	密教	<i>Fisocana voxie</i> . (密かな教え) 秘密の教義.
p. 450 l	Nanzan	南山	<i>Minamino yama</i> . (南の山) 南方の山. ¹⁵
p. 486 l	Qenmit	顕密	<i>Araure cacururu</i> . (顕はれかくるる) 顕現と秘密と. ¹⁶
p. 535 l	Riōgai	両界	二つの境界. ¶また, 二つの物, または, 二人の人. 例, <i>Riōgaino mandara</i> . (両界の曼荼羅) 男性の仏 (<i>Fotoque</i>) と女性の仏 (<i>Fotoque</i>) と. ¹⁷
p. 553 l	Sanbut	三仏 ¹⁸	すなわち, <i>Dainichino coto</i> . (大日のこと) ある仏 (<i>Fotoque</i>) の名. ¹⁹
p. 553 r	Sanco	三鈷	異教徒の儀式に用いる, 金属製の道具の一種.

p. 554 r	†Sango	三鈷	勤行の際にある坊主たち (<i>Bonzos</i>) が手に持っているある道具.
p. 606 r	Taizōcai	胎蔵界	Dainichi (大日) と呼ばれる女性の仏 (<i>Fotoque</i>) ²⁰
p. 653 l	Tocco	独鈷	坊主 (<i>Bōzos</i>) が祈禱や儀式の際に使う, ある金属製の道具.
p. 775 r	Xiqimi	檜	このように呼ばれる月桂樹のような木. ²¹

2 真言宗について直接的に言及する書翰・報告書

本稿では、『日葡辞書』における「真言宗と関連する用語」の調査結果を踏まえた上で、RUIZ DE MEDINA [1990] [1995]、および東京大学史料編纂所 [1990] ~ [2018] を対象として、真言宗について直接的・間接的に言及するイエズス会宣教師の書翰・報告書の特定を試みた。また、その過程において、真言宗とは関連しないが、本稿で扱う特定の問題を解明する手掛かりとなる書翰・報告書も見出すことができた。本稿では、以下の15点の書翰・報告書を考察の対象として扱うことにする。

- [1] 1547年12月、マラッカにおけるジョルジェ・アルヴァレスの日本諸事報告²²
- [2] 1548年夏、ゴア発、ニコラオ・ランチロットの日本報告²³
- [3] 1548年夏、ゴア発、ニコラオ・ランチロットのガルシア・デ・サー宛日本報告²⁴
- [4] 1548年12月28日付、コーチン発、ニコラオ・ランチロットの日本報告²⁵
- [5] 1549年6月22日付、マラッカ発、フランシスコ・ザビエルのヨーロッパにあるイエズス会員宛書翰²⁶
- [6] 1549年11月5日付、鹿児島発、フランシスコ・ザビエルのゴアにあるイエズス会員宛書翰²⁷
- [7] 1551年9月29日付、山口発、コスメ・デ・トルレスのインドにあるイエズス会員宛書翰²⁸
- [8] 1557年10月29日付、平戸発、ガスパール・ヴィレラのポルトガルにあるイエズス会員宛書翰²⁹
- [9] 1557年付、日本発、日本の宗教における誤りの提要³⁰
- [10] 1560年6月2日付、ミヤコ発、ロウレンソのゴアにあるアントニオ・デ・クアドロス宛書翰³¹
- [11] 1561年8月17日付、堺発、ガスパール・ヴィレラのゴアにあるアントニオ・デ・クアドロス宛書翰³²
- [12] 1561年10月8日付、豊後発、コスメ・デ・トルレスのゴアにあるアントニオ・デ・クアドロス宛書翰³³

- 【13】1562年9月頃、堺発、ガスパール・ヴィレラのインドにあるアントニオ・デ・クアドロス宛書翰³⁴
- 【14】1562年10月25日付、横瀬浦発、ルイス・デ・アルメイダのヨーロッパにあるイエズス会員宛書翰³⁵
- 【15】1562年12月10日付、ゴア発、バルタザール・ガーゴのポルトガルにあるイエズス会員宛書翰³⁶

上掲した15点の書翰・報告書のうち、真言宗について直接的に言及しているのは、【2】、【3】、【6】、【10】、【11】、【12】、【13】、【14】、【15】という9点である。そこで、各々の用例について、順に検討を行うことにしたい。

まず、【2】(1548年、ランチロット)について検討を行う。この報告書の著者であるニコラオ・ランチロット(Nicolao Lancilotto, ca. 1515–1558)は、イタリア出身のイエズス会員であり、ゴアの聖パウロ学院³⁷で院長も務めた人物である³⁸。なお、岸野[1989: 93]が指摘しているように、ランチロットの「日本報告」は4種類ある。まず、【2】(第一情報第一稿)が作成され、フランシスコ・ザビエル(Francisco Xavier, 1506–1552)の手を経て、十四代目ポルトガル領インド総督であるガルシア・デ・サー(Garcia de Sá, ca. 1486–1549)³⁹に提出された。続いて、サーの要請に応じて、【3】(第二情報)が作成された。その後、【2】と【3】とを統合し新情報を加えた「第一情報第二稿」⁴⁰や、それを改編した【4】(第一情報第三稿)が作成された。

なお、岸野[1989]が参照した写本では、【2】や【3】には真言宗固有の語句(大日、弘法大師)が記されているが、「第一情報第二稿」では「弘法大師」という語句が削除され、【4】の段階では「大日」という語句も削除されている⁴¹。そのため、本稿では【4】を扱わないことにする。

【2-1】(Text: 東大本⁴²[1990: p. 25, ll. 27–29] [Prt.]. Tr.: 東大本 [1991: p. 39])⁴³

Diz que há hy em esta terra [3] maneyras de relygyosos, os quoaes tem mosteyros á maneyra de frades, allguns delles tem moesteyros na cydade e outros fora nos matos; [...]

彼が言うには、この土地に[三(○ローマ・イエズス会文書館所蔵本により補う。)]種類の宗教家(○僧侶。)がおり、その者たちはフラーデ(○托鉢修道会修道士。)のように修道院を持っています。彼等のうちには町の中に修道院を持っている者もいれば、森の中に持っている者もいます。

【2-2】(Text: 東大本[1990: p. 27, l. 16–p. 28, l. 2] [Prt.]. Tr.: 東大本 [1991: pp. 42–43])

Há ahy outra maneyra de sacerdotes que tão bem amdão vestidos de preto, homens de muyta penytemeyca; rezão tres vezes no dia pela manhã e à tarde e à meia noyte; as casas d'oração de todos estes sacerdotes são todas de huma mesma maneyra, tem todos allguns idallos de pao dourado, outros tem imageys pimtadas em a parede; todos adorão em hum só Deos, ao qual chamão Denychy em sua lymguoagem e diz que pimtam a este Denychy

allgumas vezes com hum corpo só e tres cabeças; emtão [o] chamão Cogy, mas dise este homem que não sabya a senefiquação daquelas tres cabeças, mas que sabya que tudo era hum, Denyche e Comgy, asy como emtre nós Deos e trymdade.

別の種類の聖職者達がおおり、彼等もまた黒色の衣を着ていて多くの苦行を行なう人たちです。彼等は一日に三度、朝、午後及び真夜中に祈りを唱えます。これら聖職者達全員の祈りの家（○寺院。）はすべて同一の様式であり、すべての者が金箔の木像（○仏像。）数体を所有し、壁に描かれた画像を所有している者たちもいます。すべての者が唯一つの神に礼拝し、それを彼等の言葉でデニチ（○大日、すなわち大日如来。）と呼んでいます。彼が言うには、人びとは唯一つの身体に三つの頭を持ったデニチをしばしば描いています。彼等はそれをコジ（○荒神、すなわち荒神三宝⁴⁴。仏法僧の三宝を守る神で、怒りをあらわし三つの顔と六つの手を持つという。）と称しています。しかし、この男（○アンジロー。）はその三つの頭の意味は分からないが、デニチェ（○大日如来。）とコンジ（○荒神⁴⁴）とが全く同一であることは知っている、と言っています。それは、私達の間での神と三位一体のようなものです。

【2-3】（Text: 東大本 [1990: p. 29, ll. 18–21] [Prt.]. Tr.: 東大本 [1991: pp. 45–46]）

[...] este Xaca emsynou a todos estes povos adorar hum só Deos, Cryador de todollas cousas e mamdou que ho tivesem pymtado como acyma hé dito, com hum só corpo e tres cabeças.

この釈迦は、万物の創造主である唯一の神を崇めることをこれら民衆のすべてに教えました。そして上述したように、それ（○神。）が一つの身体に三つの頭を持って描かれるように、彼は命じました。

【2-4】（Text: 東大本 [1990: p. 34, ll. 4–8] [Prt.]. Tr.: 東大本 [1991: pp. 52–53]）

[...] e diz que cada menhã que se levamtão dizem nove palavras, levamtando dous dedos da mão dereyta, asy como nós fazemos quoamdo nos bemzemos, e fazem nove cruces à maneyra da aspa de Samt'Amdre e diz que fazem isto pera defemsão sua comtra o demonio.

彼が言うところによると、人々は毎朝起床すると、右手の二本の指を挙げて九つの言葉を唱えますが、それは、私達が十字を切る時に行なうようなものです。そして、彼等は聖アンデレのクルス（○X型の十字のこと。使徒の聖アンデレがネロ帝の治世中に傾斜十字架に懸けられて殉教したことに由来する。）のような十字を九回切ります。彼が言うところによると、彼等がこれを行なうのは悪魔に対する彼等の防禦のためです。

以上が、【2】（1548年、ランチロット）における関連箇所である。【2-1】では、日本人アンジロー（またはヤジロー）⁴⁵からの聞き取り調査の結果として、3種類の仏教宗派が日本に存在することが明記されている。【2-2】では、そのうちの一宗派が詳説されており、①多くの苦行を行うこと、②「金箔の木像」や「壁に描かれた画像」を所有していること、③大日如来を礼拝していること、といった特色に言及されている。当該の

仏教宗派は、このうちの③を根拠として、真言宗であると推定することができる。【2-3】は、釈迦の生涯に関する記述の末部であり、釈迦が民衆に対して「一つの身体に三つの頭を持つ唯一の神」を崇拜するように教えた、と記されている。ここでの「一つの身体に三つの頭を持つ唯一の神」とは、前掲した【2-2】の内容を踏まえると、「大日如来」のことを指していると判断することができる。【2-4】では、「九つの言葉を唱えながら十字を九回切ること」に言及されているが、これは『日葡辞書』で真言宗の特徴として挙げられている「九字護身法」のことであると推定できる⁴⁶。

続いて、【3】(1548年、ランチロット)について検討を行う。先述したように、この報告書は【2】と同様に、ニコラオ・ランチロットがアンジローから聞き取った内容を、ポルトガル領インド総督のガルシア・デ・サーに提出したものである。

【3-1】(Text: 東大本 [1990: p. 39, ll. 9–14] [Prt.]. Tr.: 東大本 [1991: pp. 60–61])

Diz que há nesta ilha hum luguarr de tres mil e quinhentas cazas, o quall está cituado sobre hum moomte e não morão nele senão relegiosos e seus servidores; estes dis que são muito riquos e não deixão emtrar neste luguar mollher nem alguma cousa femeia; este foi ordenado per hum omem que amtre eles se diz seer saãoto e se chamava Coombudesi, o qual diz que pode aver oito semtoos anos que foy.

彼が言うところによると、この島のある土地には三五〇〇軒の家があります。その土地はある山 (○高野山。) にあり、そこには宗教家やその奉仕者以外の者は住んでいません。彼が言うところでは、これらの者は甚だ裕福であり、この土地に婦人を入れることを許さず、またいかなる〔動物の〕雌も入れません。このことは、彼等の間で聖者であると言われ、またコンブデシ (○弘法大師。空海 (七七四—八三五) の諡。) と呼ばれていた人物によって命じられました。彼は八〇〇年前に生きていた、と言われてています。

以上が、【3】(1548年、ランチロット)における関連箇所である。【3-1】では、高野山が女人禁制であった点や、弘法大師の存在について触れられている。なお、現存する資料の中では、【3】こそが、高野山や弘法大師を西洋社会に初めて紹介した報告書である。

続いて、【6】(1549年、ザビエル)について検討を行う。この書翰の著者であるフランシスコ・ザビエルは、日本イエズス会の初代上長 (Superior, 在任 1549–1551) であり、1549年8月15日に鹿児島に上陸している。つまり、この書翰には、ザビエルが来日から二ヶ月半の間に知り得た情報が盛り込まれているのである。なお、この書翰こそが、ザビエルによる最初の日本宣教報告書であり、先行研究では「大書簡」と呼称されている。

【6-1】(Text: 東大本 [1990: p. 133, l. 22–p. 134, l. 8] [Prt.]. Tr.: 東大本 [1991: pp. 217–218])

[...] Hé daqui a Miáco trezentas legoas, segundo nos dizem, & grandes cousas nos dizem daquella cidade, afirmando-nos que passa de noventa mil casas: & que háy huma grande

universidade de estudantes em ella, que tem dentro cinco collegios principais, & mais de dozentas casas de bonzos, e dos outros como frades, que lhe chamão Ieguixu, & de freiras, as quaes chamão Hamacata.⁴⁷

Afora esta universidade de Miáco, há outras cinco universidades principaes, os nomes das quaes sam estes, Cóya, Nenguru, Feizan, Taninomine. Estas [4] estão ao redor de Miáco: em cada huma das quaes dizem que há mais de tres mil & quinhentos estudantes. Hay outra universidade mui longe, a qual se chama Bandóu, que hé a mayor & mais principal de Iapão, à qual vão mais estudantes que a nenhuma. [...]

人びとが私達に語るところによりますと、当地から都までは三〇〇レグアです。そして、彼等はその市が大きいことを私達に語り、九万戸以上の家があること、同市には大きな大学が一つあって、そこには五つの主要な学院（〇五山を指すと思われる。）があると断言しています。また坊主や、ジェギシュ（〇時宗^カ。ローマ・イエズス会文書館所蔵のスペイン語写本には Gixu となる。）と呼ばれるフラーデ（〇修道士。）の如き坊主と、アマカタと称するフレイラ（〇尼僧。）の家（〇寺院。）が二〇〇以上もあるとのこと。

都のこの大学の他に、主要な大学が五つあります。その名は次のようです。すなわち、高野、根来、フェイザン（〇比叡山）、タニノミネ（〇多武峰。ローマ・イエズス会文書館所蔵のスペイン語写本では、Omy 近江、アジュダ図書館及びリスボン市所在科学学士院図書館所蔵のポルトガル語写本では、Omi となる。）であり、これらが都の周辺にあります。それらの各大学には三五〇〇人以上の学生がいると言われています。板東と称する別の大学（〇足利学校。）が甚だ遠い所にあり、それは日本では最大にして最も主要なものであって、そこには他よりも多くの学生が通っています。

以上が、【6】（1549年、ザビエル）における関連箇所である。多くの先行研究で指摘されているように、【6-1】からは、ザビエルが高野山（古義真言宗）や根来寺（新義真言宗）などを大学（universidade）として認識していたことが読み取れる。

続いて、【10】（1560年、ロウレンソ）について検討を行う。この書翰の著者であるロウレンソ（Lourenço, 1526–1592）は、日本出身のイエズス会員であり、日本において多くの領主の改宗に寄与した人物である⁴⁸。また、書翰の宛先は、イエズス会インド管区長のアントニオ・デ・クアドロス（António de Quadros, 1528–1572）である。

【10-1】（Text: 東大本 [2018: p. (16), l. 10–p. (17), l. 2] [Esp.]. Tr.: 東大本 [2018: pp. 23–24]）

E neste Meaco luego como llegamos, unos llamavan bagios, otros nos llamavan raposas, despues nos llamavan indemoniados y gente que comia hombres. Despues un huego que se levantó cerqua la calle donde nosotros estavamos, dezian que era por nuestra causa, porque eramos hechiceros y veniamos a enseñar la lei del demonio.

Mas ja aguora los de la seita de Xingoui dizen que lo que nosotros praedicamos es el Denichi que ellos praedican, y los de la secta de Jenxu dizen que es el Fonben que ellos tienen, y miditando alcançarão a conocer. Y los de la secta de Toquexu dizen que es la misericordia que ellos praedican, y los de la secta Jodoxu dizen que es Amida. Y los de la secta Xinto dizen que es coguio que ellos tienen. Assi que todos dizen ya que lo que nos praedicamos es lo en que ellos se fundan. [...]

このミヤコでは、我々が到着して間もない頃、ある者は我々を疫病神と呼び、別の者は詐欺師と呼んでおりました。その後、我々を悪魔憑きとか、人間を食べる奴等と呼んでいました。それから、我々が滞在していた通り（○ポルトガル国立図書館所蔵の古写本には「家 casa」とある。）の周辺で火事が起きた後には、〔人びとは、火事は〕我々が原因である、なぜなら我々は妖術師で、悪魔の教えを伝えにやって来たからである、と言いました。

しかし今では、真言宗の者達は、我々が説いているのは彼等の説く大日のことであると言ひ、禅宗の者達は〔それが〕彼等〔の教義〕にある方便のことで、瞑想することでその悟りに至ると言います。また、法華宗（○底本及びポルトガル国立図書館所蔵の古写本には「トケシュウ Toquexu」とあるが、科学学士院図書館所蔵の古写本には「ホケシュウ Foquexu」とあり、前後の文脈から法華宗を指すと判断した。）の者達は彼等の説く慈悲のことであると言ひ、浄土宗の者達は、〔それは〕阿弥陀のことであると言います。神道の者達は彼等〔の教義〕にある苦行のことであると言います。このように、今では皆が、我々が説くことは自分達が依拠していることである、と言っておられます。

以上が、【10】（1560年、ロウレンソ）における関連箇所である。【10-1】では、「キリスト教の神」のことを、真言宗では「大日如来」と認識するようになっていたことが記されている。

続いて、【11】（1561年、ヴィレラ）について検討を行う。この書翰の著者であるガスパール・ヴィレラ（Gaspar Vilela, ca. 1525–1572）は、ポルトガル出身のイエズス会員であり、日本における布教に尽力した人物である。また、書翰の宛先は、イエズス会インド管区長のアントニオ・デ・クアドロスである。

【11-1】（Text: 東大本 [2018: p. (86), ll. 2–18] [Prt.]. Tr.: 東大本 [2018: pp. 136–137]）

São tambem muito enganados por hum *bonzo*, aque dizem que chamarão Combodaxi, e segundo as cousas que delle contão, parece foi o demonio em carne, ou em figura della, pellos muitos e gravissimos peccados que enventou e ensinou. Enventou nova letra, de que nesta terra usão com outra que da China têm.

Fez-se fazer muitos e sumptuosos templos, e sendo muito velho se mandou fazer huma cova ou casa debaixo do chão, e metendo-se nela, disse que não queria mais estar nesta

vida que não morria, mas que queria repousar, e que dahi a dez mil contos de annos, se alevantaria hum grande letrado em Japão, que então elle tornaria a sair neste mundo. E fazendo se tapar a cova, se ficou alli, e que avera oitocentos annos que isto fez. E este tem a gente em muita veneração, e têm pera si que ainda he vivo, e que aparece a muitas pessoas.

Dizem que em sua vida fes cousas grandes que fes decer em maneira de estrelas do ceo, e dizia as cousas futuras e cousas semelhantes. Têm-lhe muitos templos, e cada dia se lhe vão encomendar a elle, e pelo dia em que se meteo na cova, lhe fazem huma festa de tanta romagem, que não tem conto a gente que a ella vai.

また〔日本人は〕、当地で弘法大師と呼ばれる一人の仏僧（○空海。）によっても、大いに欺かれております。〔人びとが〕彼について話すことによれば、〔弘法大師は、彼が〕考案し教えた多くの重大な罪のために、悪魔が肉に宿ったか、そのまま姿を現したかのように思われます。彼は新しい文字（○平仮名。）を考案し、それにより当地ではそれをシナから受け継いでいる別のもの（○漢字。）と一緒に使います。

〔弘法大師は〕多くの豪華な寺院を建立させ、大変高齢になると、地下に穴か家を造らせました。そして、そこに入ると彼は、もはや今生にあることは望まない〔が〕、死ぬのではなく休息を欲するのである、これから一万年後、日本において一人の偉大な学者が立ち上がるであろう、その時彼（○弘法大師。）は再びこの世に出現するであろう、と言いました。そして穴に蓋をさせて、そこに留まりました。〔彼が〕そうしてから、八〇〇年が経ったということです。そしてこの者は非常に熱心な信奉者を有し、彼等からまだ生きており、大勢の人びとの前に姿を現すと考えられています。

〔人びとは、〕彼はその生涯で天の星々を落とすほどの偉大なことをなし、未来のことや類似のことを〔予〕言したと言います。〔人びとは〕彼〔のため〕に多くの寺院を設けており、毎日彼に祈りを捧げにそこへ行きますし、〔彼が〕穴に入った日（○陰暦三月二十一日。）には、多くの巡礼者で〔賑わう〕一つの祭りを彼のために行ない、そこへ来る者は数え切れないほどです。

以上が、【11】（1561年、ヴィレラ）における関連箇所である。【11-1】では、弘法大師の事績について言及されている。これらのうち、「新しい文字を考案し」という記述は、弘法大師が「いろは歌」の作者であるという伝承を踏まえていると推定できる。また、弘法大師が「偉大な学者」とともに再出現するという記述は、10世紀中頃に成立した『遺告二十五ヶ条』「第十七条」に端を発する「入定信仰」⁴⁹を踏まえていると推定できるため、ここでの「偉大な学者」とは「弥勒菩薩」のことであると判断することができる。

続いて、【12】（1561年、トルレス）について検討を行う。この書翰の著者であるコスメ・デ・トルレス（Cosme de Torres, 1510–1570）は、スペイン出身のイエズス会員であり、1549年にザビエルやアンジロー達とともに来日した最初期のイエズス会宣教師である⁵⁰。また、書翰の宛先は、イエズス会インド管区長のアントニオ・デ・クアドロ

スである。なお、トルレスは、ゴアの聖パウロ学院でアンジローの教育係を任された人物でもある⁵¹。さらに、彼はザビエルの後を継ぎ、日本イエズス会の二代目上長(Superior, 在任 1551-1570)を務めている。このように、トルレスは特に重要な宣教師の一人と考えることができる。

【12-1】(Text: 東大本 [2018: p. (130), ll. 10-16] [Esp.]. Tr.: 東大本 [2018: pp. 205-206])

Las sectas (como por otras se [h]aya escrito) son diez o doze. Las cuales aunque sean diferentes en lo que muestran para el exterior, todavia en lo interior convienen todas, scilicet, en negar el ser immortal del anima rational, aunque difieren en las cosas que veneran y adoran. Porque unos adoran el sol y la luna, otros adoran a hombres letrados y doctos y que han predicado las sectas, otros a capitanes de guerra y hombres que fueron en ella insignes, y a otros animales brutos (lo qual es luenga cosa de contar).

他〔の書翰〕ですでに記されたように、宗派は一〇乃至一二あります。それらは外観的には種々多様ですが、内実においては一致しております。すなわち、尊び崇めるものにおいては異なっておりますが、理性的靈魂の不滅を否定する点においては、〔一致しています〕。というのも、ある者達は太陽と月を崇拜し、またある者達は宗派を弘めた教養があり博学な人びとを、またある者達は戦の大將達やそれ（〇戦。）で名を成した人びとを、またある者達は粗野な動物達を崇拜しているからで、このことは話すに冗長になります。

【12-2】(Text: 東大本 [2018: p. (131), ll. 15-24] [Esp.]. Tr.: 東大本 [2018: pp. 207-208])

Los que adoran el sol y la luna, adoran tambien hun idolo a quien llaman Denix, el qual pintan con tres cabeças, y dizem [sic] que es la fuerça del sol y la luna, [y de los] elementos. Estos adoran tambien al demonio en su figura, haziendole muchos sacrificios y muy costosos y muchas vezes lo ven visiblemente. Estos, generalmente, son grandes hechizeros, y grandes inimiguos de la Ley Nuestro Señor.

Ay otro pagode o idolo a quien llaman Quanon, y dicen que fue hijo de Amida. El qual es otro hombre sabio que tambien adoran. Y los que adoran y seguien a este Quanon son como devotos y se precian desso y siempre rezan ahunque destos [h]ay pocos.

太陽と月を崇拜する人びとは大日と呼ぶ偶像も崇めており、三つの頭と共に描かれ、それらは太陽、月そして元素の力であると言われていています。この者達は悪魔の姿をしたものをも崇めており、多くの生贄や高価な捧げものをすると、しばしばそれが目に見える形で現れます。彼等は概して大妖術師で、我等の主デウスの教えの大敵です。

ほかに、観音と呼ばれる仏像乃至偶像があり、阿弥陀の息子であったと言われ、彼もまた人びとが崇拜する別の賢人です。それ（〇観音。）を崇拜し、この観音〔の教え〕に従う人びとは、数は少ないながらも、かなり敬虔で、それを大変愛し、常に祈りを捧げています。

以上が、【12】(1561年、トルレス)における関連箇所である。【12-1】では、10～12種類の宗派が日本に存在し、そのうちの一宗派が「太陽と月」を崇拝していることが明記されている。【12-2】では、「太陽と月」を崇拝する人々は、「大日如来」や「悪魔の姿をしたもの」をも崇拝していると記されている。「大日如来」を崇拝する点から、当該の宗派は「真言宗」であると推定することができる。なお、「悪魔の姿をしたもの」に関しては、前掲した『日葡辞書』における「護摩」の説明文(真言宗僧が悪魔に対して祈禱しながら行なうある種の儀式)を根拠として、不動護摩の本尊である不動明王などの「明王」を指していると推測することができる⁵²。また、「太陽と月を崇拝する人々」に関しては、後ほど詳細に検討を行うことにする。

続いて、【13】(1562年、ヴィレラ)について検討を行う。当該の書翰の宛先は、イエズス会インド管区長のアントニオ・デ・クアドロスである。なお、紙幅の都合上、【13-1】と【13-2】の間に記された「根来寺の僧兵によるミヤコに対する攻撃に関する記述」については省略することにした。また、【13-1】と【13-2】に関しては、RUIZ DE MEDINA [1995]による段落番号に準拠して、松田 [1998]による翻訳に段落番号を付した上で改行を行った。

【13-1】(Text: RUIZ DE MEDINA [1995: p. 509, l. 24–p. 510, l. 2] [Prt.]. Tr.: 松田 [1998: p. 79])

11. Em ho cerquo foi socorida a cidade do Meaco por hum tio do que a governava, ao qual saio ao encontro hum príncipe a quem ele tiranicamente tinha tomado o reino. O qual em sua companhia trazia huns bonzos de huns mosteiros com que se confederou, os quais chamão nengoros. Aremedão estes em algum modo aos comendadores de Rodes, e destes falarei alguma cousa abaixo.

11. 都の市は包囲された際、市を治めていた人の伯叔父から援軍を得た。彼により暴虐的に領国を奪われた某国主が彼に対抗すべく出向いたが、同国主は己れと同盟を結ぶ根来と称する僧院の仏僧らを伴っていた。この仏僧らは幾分ロードの騎士に似ており、彼らについては後に少しく述べるであろう。

【13-2】(Text: RUIZ DE MEDINA [1995: p. 512, l. 32–p. 514, l. 30] [Prt.]. Tr.: 松田 [1998: pp. 81–82])

24. Porque dos bonzos que na guerra do Meaco vierão en favor dos enemigos nas cartas passadas nenhuma menção fiz, declararei nesta o seu instituto, e o donde procederão, por ser cousa nova. Habitão em huma serra em muitos mosteiros. Serão por todos passante de vinte mil homens.

25. O primeiro princípio deles foi hum homem chamado Coreb bondaxi, letrado, e segundo muitas cousas que dele ouvi tinha algum demónio familiar. E este enventou hum género de letra em Japão mui usada a que chamão cana. Deixou muitas profecias do que avia de soceder. Entre elas algumas asertão por desastre.

26. A lei que deixou chama-se Xingomju. Hum dos preceitos hé que adorem ao diabo, e quem as particularidades de sua vida souber não crerá senão ser ele o mesmo diabo em carne. Deixou certas palavras escritas com as quais metem o diabo em os corpos de qualquer peça, e ali lhes responde o que lhe perguntão. Este dizem foi o primeiro author nesta terra do peccado nefandíssimo.

27. Estando pera morrer mandou lhe fizessem huma cova grande à maneira de huma casa, na qual se meteo, dizendo que queria dormir, e que dali a tantos milhares de contos de annos, antemanham viria hum grande leterado a este mundo, e que então ele sairia da cova. E mandou que ninguem antes daquele tempo fosse ousado abrir a tal cova e espertá-lo do sono.

28. Depois dele metido na cova lhe fizerão grandes e sumptuosos templos, donde hé adorado. E ele em vida os fez à sua própria peça e se mandava adorar. No lugar aonde se ele meteo está hum templo dos mais sumptuosos, chamado Coya. A esta casa concorem muitos a pedir saude e honra, e o mais necessário pera a vida, fazendo pera isso grandes offertas e dádivas.

29. Há nesa terra muitos mosteiros de bonzos, em os quais há grandes enormidades e torpezas. Na casa principal aonde está a sua sepultura estão de contínuo muitas alâmpadas acesas de quasi todo o Japão. Os que renuncião o mundo se recolhem a este mosteiro, em os quais se não tem por peccado o mais torpe deles todos. E contudo dizem que vão ali a fazer penitência.

30. Entre os sequases deste, como de contínuo ouvesse muitos roubos, furtos, bandos e pelejas em que avia muitas mortes, hum deles chamado Cacuban se ausentou, e aquirindo pera si alguns, ordenou esta forma de bonzos que chamão nengoros, entre os quais huns rezão de contínuo, outros andão en guerras, e todos têm por officio fazer cada dia sinquo frechas, e têm perpetuamente as armas aparelhadas.

31. Adorão ao seu fundador Quaquuban. Nenhum superior nem regente têm entre si: o que mais pode hé maior. Em seus ajuntamentos todavia dão alguma precedência no lugar aos que são mais antigos segundo o tempo. Sobre as cousas que an-de assentar em conselho tanto pode hum como todos eles juntos por via de desfazer alguma cousa. Porque hum só, qualquer que seja, que não concete, não se detirmina a cousa. E tantas vezes sobre huma mesma cousa se ajuntão até que todos são de hum parecer.

32. Como hé noite huns matão a outros. Roubão e furtão quanto querem mui facilmente, e isto têm que não hé contra a sua lei, ainda que fazem grande escrúpulo de matarem huma mosca, hum pássaro etcae. Porque hé preceito dela não matarem cousa viva.

24. 先にも述べたように、敵に与して都の戦さに加わり、ロードの騎士にも似た仏僧らについて私は過ぐる書簡の中で言及しなかったが、新奇なこと故、本書簡では彼らの制度と本源に関して述べよう。彼らは或る山の多数の僧院に住んでおり、その数は総勢二万人であろう。

25. 彼らの始祖は弘法大師と称する人で学識あり、彼について私が多く聞いたところによれば、或る悪魔と親密であった。同人は日本でよく用いられ、仮名と称する一種の文字を發明し、多くの予言、すなわち厭忌すべき妄言を残した。

26. 彼が伝えた教えは真言宗と呼ばれ、その戒律の一つは悪魔を崇拝することである。彼の生涯を詳しく知る者は、彼が正しく肉体に宿った悪魔であるということ以外信じぬであろう。彼は或る言葉を書き残しており、これによって悪魔をあらゆる人の体に入り込ませるが、その時（悪魔は）尋ねられる事柄に返答する。人々の言によれば、この人は当国で最も悪しき人間の一人であったという。

27. 彼はまさに死を目前にした時、家のような大きな墓穴を造らせてその中に入り、自分はこれから眠りにつくが、幾千万年後、夜明け前に一人の偉大な学者がこの世に現れるのであり、自分はその時、穴から出る故、何びともそれ以前に穴を開いて眠りから覚ましてはならないと言った。

28. 彼が穴に入った後、人々は彼を祭るための大きくて立派な諸寺院を設けた。彼は生きていた時、己れ自身のために諸寺院を建立し、己れを祭らせていたのである。彼が自ら入った（墓穴がある）場所には最も壮麗な寺院の一つがあって、高野と呼ばれている。この寺院には、多くの人が健康と名誉、その他現世に必要なものを乞い願うため訪れ、この目的により多大な供物を捧げる。

29. 当地には甚だ行状悪しき仏僧らの僧院が数多くある。彼の墓がある中心的な僧堂ではほとんど日本中の多数の燈明が絶えず灯されている。世を捨てた人々はこれらの僧院に入るが、同所ではデウスへの冒瀆となるべき多くのことは罪と見なされず、それどころか彼らは苦行をするため同所に入ると言うのである。

30. 彼に従う人々の間では絶えず略奪や窃盗、悪党、争いがあるので、彼らの一人で覚鏝(Cacubau)と称する者は（その群れを）離れ、自らのもとに或る人々を集めて根来と呼ばれる仏僧の一派を作った。彼らの間では、始終祈る者もあれば戦争する者もあり、誰もが日に五本の矢を作ることを職務と考え、常時、武器を整えている。

31. 彼らは創始者の覚鏝を崇め、彼らの上に立つ者も統率する者もない。最も大きな力を有する者が彼らの集会において筆頭者となるが、場合によっては、よりいっそう古参の人に上位の席を譲る。協議して事を決する際には、まず問題点を解決することにより、一人が決することも、また彼ら全員で決することも可能であり、同じ事柄について全員の意見が一致するまで幾度となく会合する。

32. 夜になれば欲するままにいと容易に殺し合い、盗みを働くが、これを彼らの教えに反しないことと考えている。もっとも、生き物を殺さぬ戒律があるため、彼らは蠅や鳥などを殺すことには大いに躊躇する。

以上が、【13】（1562年、ヴィレラ）における関連箇所である。【13-1】では、根来寺の僧兵について言及されている。なお、RUIZ DE MEDINA [1995: 510 n. 19] に従えば、

「comendadores de Rodes」という語句は、1310年から1522年にかけてロドス島を本拠地としていた「聖ヨハネ騎士団」⁵³のことを指しており、松田 [1998]による「ロードの騎士」という訳は誤りであろう。【13-2】では、①弘法大師と高野山に関する内容(nos. 25–29)と、②興教大師覚鑿(1095–1143)と根来寺に関する内容(nos. 24, 30–32)とに言及されている。これらのうち、①に関しては、同一の執筆者が1561年に著述した【11-1】とほぼ共通する内容であり、「入定信仰」についても言及されている。他方、②は、覚鑿が根来寺を開山したことや、根来寺の規模や運営体制について、西洋社会に初めて紹介された記述である。

続いて、【14】(1562年、アルメイダ)について検討を行う。この書翰の著者であるルイス・デ・アルメイダ(Luís de Almeida, ca. 1523–1583)は、ポルトガル出身のイエズス会員であり、医学を通じて日本における布教に尽力した人物である。さて、当該の書翰には元々は「大日」という語句が用いられていたのであるが、後世になると当該の語句の使用は布教上の失敗あるいは誤りと見做され、該当箇所が訂正・削除されるようになる⁵⁴。そのため、『エヴォラ版日本書翰集』に基づく松田 [1998]や村上・柳谷 [1968]による和訳には、該当箇所が存在しない。幸いなことに、訂正・削除前のテキストがRUIZ DE MEDINA [1995]に、部分訳が岸野 [1998]に、それぞれ収録されている。また、【14-1】に関しては、RUIZ DE MEDINA [1995]による段落番号に準拠して、岸野 [1998]による翻訳に段落番号を付した上で改行を行った。

【14-1】(Text: RUIZ DE MEDINA [1995: p. 547, ll. 8–32] [Prt.]. Tr.: 岸野 [1998: pp. 231–232])

43. Comesando-lhes a pregar das cousas de Deos diante do mesmo marido – que todos estávamos asentados ao derredor de hum grande brazeiro por causa do grande frio, por ser em entrada do mês de Janeiro – me perguntarão se Daniche era Deos. O qual Daniche hé hum seu pagode. Eu lhe dei muitas razões que ho não era, de que se satisfizerão. He isto me perguntarão porque o padre Mestre Francisco lhes avia pregado que Daniche era Deos e que o adorasem. E foi por estar mal emformado das leis de Japão, polas quais têm os japões que o Daniche hé o criador e primeiro princípio das cousas.

44. Mas os seus letrados emtendem Daniche ser primeiro princípio e criador de tudo muito doutra maneira do que nós entendemos Deos ser criador. Porque têm que Daniche hé a matéria prima que em totaldas cousas que se vêm está, e sem ella não podem ser as cousas que se sentem e vivem pera sempre, e não se pode ver com os olhos corporais, mas emtende-se com o emtendimento. Hé impacível, porque nem o fogo o pode queimar nem espada cortar. Sem ella nenhuma cousa pode ter ser, e por ella todas as cousas são.

45. De maneira que por estas e outras imformações que darião ao padre, lhes mandou que adorasem a Dainiche, paresendo-lhe que este nome era de Deos, que hé o criador verdadeiro, não cuidãodo que por elle emtendião a matéria prima.

43. 私はその夫〔新納伊勢守〕の面前で、彼ら〔彼の家族〕に神について説教し始めた。一月初めで非常に寒かったので、私たちは大きな火鉢を囲んでいた。その時、彼らからダニチ daniche〔大日〕はデウスであるか、と質問された。ダニチは彼らの偶像の一つである。私は、そうではない、と多くの理由を挙げたので、彼らは納得した。そこで彼らは私に対して、何故パードレ・メストレ・フランシスコはダニチがデウスであり、それ〔ダニチ〕を拝むように説いたのであるか、と質問した。それは（ザビエルが）日本の教え〔宗教〕——それによって日本人はダニチが創造者であり、ものの第一原理であると理解している——についてよく分かっていたからであった。

44. 彼らの知識人は、ダニチが万物の第一原理であり、創造者であると理解しているが、それは私たちが神を創造者であると理解しているのとは、とても異なった〔理解の〕仕方である。というのは、彼らは次のように考えているからである。即ち、ダニチは存在する万物のマテリア・プリマ materia primaであり、それなくして感覚を持ち、生きているものはいつまでも存在することができない。ダニチは肉体的な眼では見えず、悟性 *entendimento* によってとらえられる。ダニチは感覚がないので、火によって燃されることも、剣によって切られることもありえない。ダニチなくしていかなるものも存在できず、ダニチによって万物は存在している、と。

45. それゆえ、パードレ〔ザビエル〕は得られたこのような情報や他の情報をもとにダイニチ dainicheを拝むように命じたのである。彼には、この名称は真の創造者であるデウスのものであると思えたし、それによって日本人がマテリア・プリマ materia primaを考えるととは思ってもみなかったからである。

以上が、【14】（1562年、アルメイダ）における関連箇所である。【14-1】では、フランシスコ・ザビエルが日本における布教の初期段階では「キリスト教の神」と「大日如来」とを同一視していたが、後にそれが訂正されたことについて言及されている。そして、両者を区別する基準として、「マテリア・プリマ」(*matéria prima*)、すなわちスコラ哲学における「第一質料」（万物の基礎材料）であるか否かという点が挙げられている⁵⁵。水戸 [1992b: 175 (2)–173 (4)] が指摘しているように、イエズス会の宣教師達は、「大日如来」と「キリスト教の神」とが第一原理 (*primeiro princípio*) であり創造者であるという点では共通していると考えているが、「大日如来」は「第一質料」であるが「キリスト教の神」はそうではないため、両者を正反対の存在として認識している。

最後に、【15】（1562年、ガーゴ）について検討を行う。この書翰の著者であるバルタザール・ガーゴ (Balthazar Gago, 1515–1583) は、ポルトガル出身のイエズス会員であり、日本における布教に尽力した人物である。また、【15-1】に関しては、RUIZ DE MEDINA [1995] による段落番号に準拠して、松田 [1998] による翻訳に段落番号を付した上で改行を行った。

【15-1】 (Text: RUIZ DE MEDINA [1995: p. 603, l. 18–p. 604, l. 5] [Prt.]. Tr.: 松田 [1998: p. 24])

80. [...] Dizem mais, que se acabará este mundo e que se reformarão todas as cousas, e que no fim virá Miroqu que dizem que hé Xaca.

81. E que en Japão estaa outro, por nome Combodex, vivo de muitos annos, em huma cova, esperando com as mãos alevantadas por Miroqu ou Xaca. Têm que depois de mortos tornão a nacer no que querem, em rei ou em besta.

82. Desta cabeça saio huma ceita chamada Dainichi, que adorão 3 em hum só, que elles tomão polla matéria prima. Desta ceita saem huns per nomes Amanbuxis, que trazem hum tiracolo com borlas. Estes adorão diretamente o demónio em certos sinais, e estão 7 dias en montes altos sem comerem até se verem com o demónio pasando grandes trabalhos e penitências.

80. [...] 彼らの言によれば、この世は終わり、物はことごとく改められ、最後に弥勒が現れるという。また、それは釈迦であるという。

81. 日本に弘法大師と称する者がおり、弥勒、すなわち釈迦を待ち受けて、穴の中で幾年も手を掲げて生きている。彼らは死んだ後、望み通りに王として、或いは獣として再び生まれると考えている。

82. この頭首から大日と称する宗派が生じた。同宗派は三つを一つとして崇め、これを源の物質と考えている。この宗派から山伏と称する者らが現れた。彼らは房のついた帯を肩から掛け、或る特徴のもとに悪魔を直接に崇拝し、悪魔と対面するまで七日間高い山の中で食を断ち、非常な難行苦行に従う。

以上が、【15】(1562年、ガーゴ)における関連箇所である。【15-1】では、上掲した【11-1】や【13-2】と同様に、弘法大師の「入定信仰」について言及されている。また、弘法大師が「大日と称する宗派」、すなわち「真言宗」の開祖であることが明記されている。さらに、「真言宗」を母体として「山伏」が現れたと述べられている。なお、松田 [1998]における「源の物質」の原語は「*matéria prima*」であり、【14-1】で言及したようにスコラ哲学における「第一質料」のことである。つまり、【15-1】においても「真言宗」は、「一つの身体に三つの頭」を持ち「第一質料」である「大日如来」を崇拝する宗派としてイエズス会の宣教師達に認識されている。

3 真言宗について間接的に言及する書翰・報告書

筆者は、前掲した15点の書翰・報告書のうち、【2】における「苦行者」に関する記述と、【5】【6】【7】【8】における「太陽と月を崇拝する人々」に関する記述とが、真言宗について間接的に言及していると判断している。そこで、これら2種類の記述について、順に検討を行うことにしたい。

3.1 「苦行者」に関する記述

【2】(1548年、ランチロット)には、「苦行者」に関する記述が以下のように存在する。なお紙幅の都合上、【2-5】と【2-6】の間に記された「山岳修行に関する記述」については省略することにした。

【2-5】(Text: 東大本 [1990: p. 30, ll. 24–27] [Prt.]. Tr.: 東大本 [1991: p. 47])

Diz que costumão nesa terra hum jenero de penytemcyia da maneyra seguymte: jejuão e goardão castidade cem dias, depois emtrão em hum mato muy grande por o quoa estão muytos pagodes à maneyra de ermydas; [...]

彼が言うには、この土地には次のような一種の苦行を行なう習わしがあります。彼等(○僧侶)は断食をして一〇〇日間禁慾を守ります。そのあとで彼等は深い森に入りますが、その辺りには庵のような堂塔が多数あります。

【2-6】(Text: 東大本 [1990: p. 31, l. 26–p. 32, l. 14] [Prt.]. Tr.: 東大本 [1991: pp. 49–50])

Diz que, amdamdo neste deserto cem homens jumtos, muytas vezes lhes acomtece de parecerem duzemtos; emtão o mestre, oulhamdo pera eles, ve muytos que não tem taboas aos peytos; mamda estar a todos quedos e rezar pera Denechy que os lyvre de tal companhia porque tem pera sy que aquelles cemto que ahy aparecem são diabos e cada hum destes diabos se poem jumto a hum destes homens e toma totalmente a sua forma, de maneyra que hum Joam parece dous e hum Pedro dous, sem aver deferemça de hum a outro, e asy fazem todos da mesma maneyra e, em fazemdo oração segumdo lhes emsyna o mestre, loguo desaparecem estes demonyos e, quoaemdo estes penytemtes saem de tal penytemcyia, fiquão tão magros e pretos que parecem a morte e, como numqua se despem nem lavão neste tempo, tornão pera casa muyto bem acompanhados, e todos lhes beyjam as vesteduras; diz que há em esta terra muytos feyticeyros e porem que amtre os homens prudemtes são tidos em má comta; há hy tão bem gramdisemos estrolyguos, os quoaes predizem muytas cousas.

彼が言うには、一〇〇人の者が一緒になってこの無人の地を歩いている時に、彼等が二〇〇人に見えることがしばしば起こります。その時、師匠は彼等の方を見回して多数の者がその胸に〔名〕札を付けていないのを見つけます。彼は全員に向かって静止するように言い、そのような輩から彼等を自由にしてくれるようにデネチ(○大日如来)に祈るように命じます。と言うのは、彼等はそこに現われている、その一〇〇人が悪魔であること、そしてこれらの悪魔の各々がこれらの各人と一緒になって、全体としてその形を作っていること、このため、一人のジョアンが二人のジョアンと思われ、一人のペドロが二人のペドロに見えるように双方に違いがなく、従って、全員が同じような振舞いをしている、と考えているからです。それで、師匠が彼等に教えるとおりに彼等が祈りを唱えると、これらの悪魔達はたちまちにして消え失せてしまいます。これらの苦行者達がそのような苦行を終える時には、彼等は余りにも痩せこけていて黒ずんでいるので死者のように見えます。そして、

彼等はこの期間中に決して着物を脱がず身体を洗わないために、たいそう手厚く介抱されて家に戻ります。それで、すべての者が彼等の着物に触ります。彼が言うには、この土地には、多数の祈禱師がいますが、彼等は分別のある人びとの間ではまったく注目されていません。そこにはまた非常に偉大な占星家(○陰陽師。)がおり、彼等は「何かが起こる以前に(○ローマ・イエズス会本により補う。)」多くの事柄を予言しています。

以上が、【2】(1548年、ランチロット)における関連箇所である。【2-5】では、アンジローからの聞き取り調査の結果として、「苦行者」が日本に存在することが明記されている。【2-6】では、苦行中に起こる出来事などが詳説されており、①「苦行者」の人数が二倍に見えることがしばしば起こり、その際に大日如来に祈ること、②「苦行者」が尊敬されているのに対して「祈禱師」は注目されていないこと、といった点が特徴的である。

さて、先行研究のうち、岸野[1989: 113-115]による【2-6】の和訳では、当該箇所が修験道と関連づけられており、ここでの「苦行者」は「修験者」を指すと判断されている。他方、東京大学史料編纂所[1991]における【2-5】の和訳では、ここでの「苦行者」は「僧侶」であると注記されているが、その根拠については明示されていない。このように、先行研究においては、「苦行者」の所属を巡って意見が分かれている。

この問題について、筆者は【2-6】における「祈禱師」(feyticeyro)という用語に着目した。つまり、当該箇所では「苦行者」と「祈禱師」が対比的に扱われているため、仮に「祈禱師」が「修験者」か「僧侶」のいずれかを意味する語句であれば、もう片方が「苦行者」に相当することになる。そのため、ランチロットによる【2】【3】【4】や、彼が参照し得たであろう【1】(1547年、アルヴァレス)を調査したところ、「祈禱師」に関する重要な記述が【1】に存在することが判明した。

そこで、【1】(1547年、アルヴァレス)について検討を行う。この報告書の著者であるジョルジュ・アルヴァレス(Jorge Álvares)⁵⁶は、ポルトガル出身の商人であり、アンジローの日本からの出国を手助けし、マラッカにいたザビエルの元まで送り届けた人物である。なお、この報告書は、ザビエルの依頼を受けて執筆されたものであり、日本滞在経験者による西洋社会に向けた日本報告書としては最古のものである。

【1-1】(Text: 東大本[1990: p. 11, ll. 4-6][Prt.]. Tr.: 東大本[1991: p. 17])

Estes japões tem duas maneyras de casas de devação e estas casas tem padres que vyvem demtro e cada hum tem sua cela omde dorme e tem seus lyvros e chamão-lhe bomzes [...]

これらの日本人は二種類の信仰の家(○寺院と神社。)を持っています。これらの家にはその中で生活しているパードレ達(○僧侶と神主。)がいます。各人は彼自身の小部屋(○房。)を持っていて、そこで眠り、また彼自身の書物(○經典_{カ。})を所持して坊主と呼ばれています。

【1-2】 (Text: 東大本 [1990: p. 13, ll. 9–17] [Prt.]. Tr.: 東大本 [1991: pp. 21–22])

Vy la outra maneyra d'ordem de padres que adorão outros idallos, que hé a mesma ordem da terra; tem seus idallos, pequenos metidos em tabernaquollos que numqua os vem senão em allguma festa; estes idallos tem-nos em bosques gramdes fora do lugar e são muy venerados e estes amdão vestidos como os leygos, trazem armas como eles e na cabeça trazem hum barrete quoadrado tam amcho como hum punho, com barbycacho debayxo da barba, e este tem cuydado do buzio quoamdo querem ajumtar gemte; são gramdes feytyceyros e trazem sempre comtas no pescoço, por omde os conhecem, [...]

私はその地で別の偶像を崇拝しているパードレ達（○修験者。）の属するもう一つの宗団（○修験道。）を見ました。これはこの国固有の宗団です。彼等は聖櫃（○横笈。）に入れられた自分達の小さな偶像を所持していて、ある祭の時以外には誰も決してそれらを見ません。彼等はこれらの偶像を村外れの大きな社の中に持っていて、それらを非常に尊崇しています。これらの者たちは俗人同然の出立ちで、同じように武器（○柴薙または柴打。）を携えています。そして、頭には握り拳程の巾広く四角い帽子（○頭襟。）を付けていて、顎鬚の下で紐で結えています（○欄外には、「これが帽子の形です」と註記がある。）。彼等は人びとを集めようとする時には法螺貝を吹いて知らせます。彼等は偉大な祈禱師であり、いつも首に数珠（○苛高念珠⁵⁷。）を掛けています。これによって、人々は彼等を認識します。

以上が、【1】（1547年、アルヴァレス）における関連箇所である。【1-1】では、僧侶に対して、「パードレ」（padre）あるいは「坊主」（bomze）という表現が用いられている。【1-2】では、修験者に対して、「パードレ」（padre）あるいは「祈禱師」（feytyceyro）という表現が用いられている。

さて、【1-2】における「feytyceyro」と【2-6】における「feyticeyro」とは、現代ポルトガル語における「feiticeiro」に相当するため、どちらも「祈禱師」を意味する語句である。そのため、【2-6】における「祈禱師」とは、「修験者」を指していると判断することができる。この考えが妥当であれば、【2-6】における「苦行者」は、「デネチ（大日如来）に祈る」という記述も考慮すると、「真言宗の僧侶」を意図していることになる。なお、前掲した【2-2】では、真言宗が「多くの苦行を行なう人たち」と説明されているため、それに後続する【2-5】や【2-6】は「真言宗における苦行」に関するアンジローによる具体的な解説であると考えることができる。

3.2 「太陽と月を崇拝する人々」に関する記述

【5】（1549年、ザビエル）、【6】（1549年、ザビエル）、【7】（1551年、トルレス）、【8】（1557年、ヴィレラ）には、「太陽と月を崇拝する人々」に関する記述が以下のように存在する。

【5-1】 (Text: 東大本 [1990: p. 96, ll. 15–24] [Prt.]. Tr.: 東大本 [1991: p. 157])

[...] Depois de lhe ser declarada nossa santa fé, ouvi dizer a hum delles, por nome Paulo de Santa Fé, com muitos suspiros: Ó gentes de Iapão, coitados de vós outros, que adorais por deoses as criaturas que Deos fez para serviço dos homens! Preguntei-lhe, porque dezia isto? respondeo-me que o dezia pola gente de sua terra, que adoravão ao sol & à lua, sendo o sol & a lua como moços & criados dos que conhecem a Iesu Christo, que nam servem para mais, senão para alumiar o dia e a noite, para os homens com esta claridade servirem a Deos, glorificando-o na terra, & a seu Filho Iesu Christo.

私達の聖なる信仰が彼等に説明されたのち、私はパウロ・デ・サンタ・フェー（○聖信のパウロ、すなわちアンジローを指す。）という名のそのうちの一人が嘆息して、「ああ、日本の人びとよ。神が人間に奉仕させるためにお造りになった被造物を、あなた方が〔異教の〕神々として礼拝しているのは不憫なことである」、と言うのを聞きました。私は彼に、どうしてそのようなことを言うのか、と質しました。彼は故国の人びとについてそのように述べたのは、彼等が太陽と月を礼拝しているからであり、太陽と月はイエズス・キリストを識る者には僕乃至召使いの如きものであつて、昼夜を照らし、人びとがこの明るさによって神に奉仕し、地上において神とイエズス・キリストの御子を讃美すること以外には他に奉仕することがないからである、と私に答えました。

【6-2】 (Text: 東大本 [1990: p. 116, ll. 23–26] [Prt.]. Tr.: 東大本 [1991: p. 189])

[...] Crem os mais delles em homens antigos: os quaes (segundo tenho alcançado) erão homens que viverão como filosofos: muitos destes adorão o sol, e outros a lua: folgão de ouvir cousas conforme a razão: [...]

彼等の大多数は昔の人びとを信仰しています。彼等は（私が得た知識によると）哲学者のように生きていた人びとです。多くの人びとは太陽を礼拝し、月を礼拝している人びとも他にあります。彼等は道理に叶った事柄を聴くことを喜びます。

【7-1】 (Text: 東大本 [1990: p. 169, ll. 2–13] [Prt.]. Tr.: 東大本 [1994: p. 15])

[...] Há grandissimo numero destes, porque bons e maos pola grande facilidade da seita cuidão se salvão: & destes há em duas maneiras tambem, huns adorão este somente, & chamão-se Itocóxos, outros a este e aos demais: outros há que adorão o sol, & a lua, dizendo que o sol & a lua sam Deos, & assi adorão a todas as cousas, ate adorar ao demonio, porque dizem que tambem o demonio hé Deos, por ser sua criatura. Estes são mui inhorantes, & há pouco que fazer em os confundir, polas muitas ignorancias que tem & crem.⁵⁸

Outros há que chamão Ienxús, & destes há em duas maneiras: [Huns dizem que não há alma e que quando morre o homem tudo morre, porque dizem que o que se criou de nada se torna em nada, e estes] sam homens de grandes meditações, [...]

善人も悪人もこの宗派が非常に分かりやすいため救われると思っていますので、極めて多数の者がこれを信じています。この人びとの中にも二種類あり、ある人びとはこれ（○阿弥陀。）だけを崇拜して一向宗（○浄土真宗。）と称し、他の者たちはこれと他の偶像を礼拝しています。この他にも、太陽と月とが神であると言って日月を崇拜する者がいます。このように、彼等は万物を崇拜し悪魔までも礼拝しています。なぜなら、悪魔もまた〔神の〕被造物であるために神であると言われているからです。これらの人びとは甚だ無知です。そして彼等のその無知と彼等が信じている誤謬のために、彼等を論破することは容易です。

他に禅宗と称するものがあり、これは二種類あります。[ある人びとは、無から造られたものは無に帰すと言われているために、靈魂は存在せず人が死ねば一切が死ぬ、と言っています。そして、これらの人びとは（○前記アジュダ図書館所蔵の古写本より補う。)]偉大な瞑想家です。

【8-1】（Text: 東大本 [2011: p. 55, ll. 7-13] [Prt.]. Tr.: 東大本 [2014: p. 75]）

[...] Outros se chamão *fotoquas*, os quaes são em demasia pertinazes. Estes não querem ouvir rezão nem cousa de Deos, e dizem que não dão crédito senão ao que têm escrito, que aquella hé a verdade. Estes, hé milagre fazer hum christão. Outros adorão ao soll que governa todo mundo, e dizem que hé vivo. Outros à lua, outros ao mesmo demónio, e lhe têm templos em sua figura pintada, mais fe[i]a do que nós pintamos. Têm muitas maneiras de frades e freiras d'ábitos pardos, brancos e pretos. [...]

さらにある人びとはフォトクァ（○仏。）と呼ばれ〔るものを崇めており〕、彼等は非常に頑迷です。彼等は道理もデウスの事柄も聴くことを望まず、書かれた物以外を信用せず、それ（○書物。）は真理であると言っています。このような人びと〔については〕、一人をキリスト教徒にするのも奇跡です。他の者は全世界を司る太陽を崇拜し、それは生きていますと言います。他の者は月〔を崇めます〕。別の者は悪魔そのもの〔を崇め〕、それらのために、私達の描くものよりいっそう醜悪な像を描いた御堂を持っています。種々の修道士や修道女がおり、鼠色や白色、黒色の僧服を纏っています。

以上が、【5】（1549年、ザビエル）、【6】（1549年、ザビエル）、【7】（1551年、トルレス）、【8】（1557年、ヴィレラ）における関連箇所である。【5-1】では、アンジローからの情報として、日本人が「太陽と月」を神として崇拜していることが記されている。【6-2】では、「哲学者のように生きていた人びと」（釈迦や阿弥陀）や「太陽や月」を崇拜する人々の存在に言及している。【7-1】では、「太陽と月」を神として崇拜する人々が、「悪魔」も崇拜していることが明記されている。なお、当該の記述は、前後の文章が浄土真宗・浄土宗と禅宗の説明であることを根拠として、特定の仏教宗派に関する説明であると判断することができる。【8-1】では、「太陽」や「月」や「悪魔」を崇拜する僧侶について

記されている。

さて、これらの書翰からの引用箇所には、真言宗に関連する用語は用いられていない。しかし、先述したように、1561年にトルレスが執筆した【12-2】では、「太陽と月」を崇拝する人々は、「大日如来」や「悪魔の姿をしたもの」(明王)をも崇拝していると述べられている。そのため、執筆者が同一であることから、【7-1】の記述も真言宗に関する説明であると判断することができる。

このように、【7-1】と【12-2】では、「太陽」と「月」と「悪魔」に対する崇拝者(真言宗)がいると記されている。これに対して、【8-1】では、「太陽」や「月」や「悪魔」に対する崇拝者がいると記されている。【8-1】の記述だけを見れば、これら三者に対する崇拝者は別々に存在するように思えるが、同時代に執筆された【7-1】と【12-2】の記述を踏まえると、真言宗のことを意図していると推測することができる。

また、【5-1】には「太陽」と「月」に対する崇拝者の存在が、【6-2】には「太陽」や「月」に対する崇拝者の存在が、それぞれ明記されている。これらの書翰では「悪魔」に対する崇拝については言及されていないが、【7-1】【8-1】【12-2】の記述や、アンジローが元々は真言宗の信者⁵⁹であったことを踏まえると、真言宗に対する言及である蓋然性が高い。この考えが妥当であるならば、従来はザビエルによる真言宗に対する言及は、【6-1】における「高野」(Cóya)という語句のみであると考えられていたが、【5-1】や【6-2】においても真言宗に言及しているということになる。

ここで問題となるのは、これらの書翰における「太陽」と「月」が何を指しているのかという点である。1561年に記された【12-2】に従えば、大日如来には三つの頭があり、それぞれの頭が「太陽」、「月」、「元素」を象徴するとのことである。しかし、真言宗における一般的な大日如来は「一つの身体に一つの頭を持つ姿」であり、幾つかのイエズス会宣教師の書翰・報告書(【2-2】【2-3】【12-2】【15-1】)で言及される「一つの身体に三つの頭を持つ姿」ではない。さらに、【12-2】と同様の解釈は、他の書翰・報告書には存在しない。そのため、この1560年代に成立したと見られる解釈を、時代的に先行する【5-1】【6-2】【7-1】【8-1】に当て嵌めることはできない。

また、【9】(1557年、日本の宗教における誤りの提要)⁶⁰や【15】(1562年、ガーゴ)⁶¹には、阿弥陀の息子が「観音」と「勢至」であり、各々が「太陽」と「月」に相当するという主旨の記述が存在する。しかし、【12-2】では、「太陽」と「月」と「大日如来」と「悪魔」に対する崇拝者(真言宗)と、阿弥陀の息子としての「観音」に対する崇拝者とは、明確に区別されている。そのため、【5-1】【6-2】【7-1】【8-1】における「太陽」と「月」に関しては、【12-2】と同系統の記述であることを根拠として、「観音」と「勢至」を指す訳ではないと判断することができる。

さて、上述した【5-1】と【7-1】には、日本人が「太陽と月」を神として崇拝していることが記されている。そのため、ここでの「太陽」に対する崇拝とは、当時は神仏習合が行われていたことから、本地である「大日如来」に対する信仰か、その垂迹である「天照大神」⁶²に対する信仰であると推測することができる。他方、ここでの「月」に対す

る崇拝については判然としないが、「月読尊」(あるいは本地である「阿弥陀如来」)に対する信仰が行われていた可能性や、密教における「月輪観」⁶³がイエズス会宣教師に「月」に対する崇拝であると誤認された可能性が想定できる⁶⁴。

おわりに

本稿では、イエズス会宣教師が1548年から1562年にかけて執筆した書翰・報告書に基づいて、16世紀中葉の真言宗について以下の三つの観点から検討を行った。

第一に、調査すべき語句を把握するために、1603・1604年に長崎で刊行された『日葡辞書』を対象として、「真言宗と関連する用語」の特定を行った。その結果、「真言宗と関連することが明記されている用語」が10件、「真言宗と関連する可能性がある用語」が16件、同辞書に存在することが判明した。

第二に、真言宗について直接的に言及する書翰・報告書の特定を行った。その結果、ルイス・フロイスの来日以前という条件下では、真言宗について直接的に言及している書翰・報告書は、【2】(1548年、ランチロット)、【3】(1548年、ランチロット)、【6】(1549年、ザビエル)、【10】(1560年、ロウレンソ)、【11】(1561年、ヴィレラ)、【12】(1561年、トルレス)、【13】(1562年、ヴィレラ)、【14】(1562年、アルメイダ)、【15】(1562年、ガーゴ)、という9点であることが判明した。

第三に、真言宗について間接的に言及する書翰・報告書の存在を指摘した。具体的には、【2】(1548年、ランチロット)における「苦行者」に関する記述と、【5】(1549年、ザビエル)、【6】(1549年、ザビエル)、【7】(1551年、トルレス)、【8】(1557年、ヴィレラ)における「太陽と月を崇拝する人々」に関する記述とが、真言宗について間接的に言及していると推定することができる。

参考文献

岸野久

[1989]『西欧人の日本発見 —ザビエル来日前 日本情報の研究—』, 吉川弘文館。

[1998]『ザビエルと日本 —キリシタン開教期の研究—』, 吉川弘文館。

[2001]『ザビエルの同伴者 アンジロー —戦国時代の国際人—』, 吉川弘文館。

河野純徳 [訳]

[1985]『聖フランシスコ・ザビエル全書簡』, 平凡社。

武内孝善

[2008]『弘法大師 伝承と史実 —絵伝を読み解く—』, 朱鷺書房。

土井忠生・森田武・長南実 [編訳]

[1980]『邦訳 日葡辞書』, 岩波書店。

東京大学史料編纂所 [編]

[1990]『日本関係海外史料 イエズス会日本書翰集』原文編之一：

- 自天文十六年十一月 至天文二十一年十二月，東京大学史料編纂所。
 [1991]『日本関係海外史料 イエズス会日本書翰集』譯文編之一（上）：
 自天文十六年十一月 至天文十九年十月，東京大学史料編纂所。
 [1994]『日本関係海外史料 イエズス会日本書翰集』譯文編之一（下）：
 自天文十九年十二月 至天文二十一年十一月，東京大学史料編纂所。
 [1996]『日本関係海外史料 イエズス会日本書翰集』原文編之二：
 自天文二十一年十二月 至弘治元年十一月，東京大学史料編纂所。
 [1998]『日本関係海外史料 イエズス会日本書翰集』譯文編之二（上）：
 自天文二十一年十二月 至天文二十三年十一月，東京大学史料編纂所。
 [2000]『日本関係海外史料 イエズス会日本書翰集』譯文編之二（下）：
 自天文二十三年十二月 至弘治元年十一月，東京大学史料編纂所。
 [2011]『日本関係海外史料 イエズス会日本書翰集』原文編之三：
 自弘治元年十二月 至永禄二年十月，東京大学史料編纂所。
 [2014]『日本関係海外史料 イエズス会日本書翰集』譯文編之三：
 自弘治元年十一月 至永禄二年十一月，東京大学史料編纂所。
 [2018]『日本関係海外史料 イエズス会日本書翰集』原譯文編之四：
 自永禄二年十二月 至永禄四年八月，東京大学史料編纂所。
- 中野遙
 [2017]「キリシタン版『日葡辞書』補遺篇の見出し語 一本篇との重出語について一」，
 『上智大学国文学論集』50: pp. 144 (33)–126 (51).
- 松田毅一 [監訳]
 [1997]『十六・七世紀イエズス会日本報告集』第III期第1巻，同朋舎。
 [1998]『十六・七世紀イエズス会日本報告集』第III期第2巻，同朋舎。
- 水戸博之
 [1992a]「真言宗とカトリック 一十六・十七世紀における邂逅と宗論一」，
 『密教学研究』24: pp. 31–45。
 [1992b]「「大日」と「第一質料」」，『豊山教学大会紀要』20: pp. 176 (1)–164 (13).
- 村上直次郎 [訳]・柳谷武夫 [編]
 [1968]『イエズス会士日本通信』上，雄松堂出版。
 [1969]『イエズス会士日本通信』下，雄松堂出版。
- 森田武 [編]
 [1989]『邦訳 日葡辞書 索引』，岩波書店。
- 大和昌平
 [2014]「キリシタン時代最初期におけるキリスト教と仏教の交渉」，『東京基督教大学
 紀要』24: pp. 109–139。
- 山本匠一郎
 [2011]「大日とデウス」，『現代密教』22: pp. 261–299。

APP, Urs

- [1997a] “St. Francis Xavier’s Discovery of Japanese Buddhism: A Chapter in the European Discovery of Buddhism (Part 1: Before the Arrival in Japan, 1547–1549),” *The Eastern Buddhist* 30 (1): pp. 53–78.
- [1997b] “St. Francis Xavier’s Discovery of Japanese Buddhism: A Chapter in the European Discovery of Buddhism (Part 2: From Kagoshima to Yamaguchi, 1549–1551),” *The Eastern Buddhist* 30 (2): pp. 214–244.
- [1998] “St. Francis Xavier’s Discovery of Japanese Buddhism: A Chapter in the European Discovery of Buddhism (Part 3: From Yamaguchi to India, 1551–1552),” *The Eastern Buddhist* 31 (1): pp. 40–71.

COSTELLOE, M. Joseph, S.J. [tr.]

- [1992] *The Letters and Instructions of Francis Xavier*. St. Louis, Missouri: The Institute of Jesuit Sources [reprint Anand, Gujarat: Gujarat Sahitya Prakash, 1993].

RUIZ DE MEDINA, Juan, S.J. [ed.]

- [1990] *Documentos del Japon 1547–1557*. Monumenta historica Societatis Iesu 137. Roma: Instituto Histórico de la Compañía de Jesús.
- [1995] *Documentos del Japon 1558–1562*. Monumenta historica Societatis Iesu 148. Roma: Instituto Histórico de la Compañía de Jesús.

SCHURHAMMER, Georg, S.J., & WICKI, Josef, S.J. [ed.]

- [1944] *Epistolae S. Francisci Xaverii aliaque eius scripta*. Tomus 1. Roma: Monumenta Historica Soc. Jesu.
- [1945] *Epistolae S. Francisci Xaverii aliaque eius scripta*. Tomus 2. Roma: Monumenta Historica Soc. Jesu.

-
- 1 松田 [1997: 57] には「多武峰 (別写本、近江)」と記述されていることから、『エヴォラ版日本書翰集』以外の写本も参照しているようである。しかし、当該の写本に関する書誌情報については、同書では明示されていない。
- 2 Cf. 中野 [2017: 144 (33)–143 (34)].
- 3 森田 [1989] に準拠して、土井ほか [1980] の各頁における左欄の場合には「l」を、右欄の場合には「r」を、それぞれ付した。
- 4 土井ほか [1980] による同ページ中の注記に従い、「Xingoxūs」を「Xingonxūs」に修正した。
- 5 土井ほか [1980] に準拠して、元々は補遺篇に収録されていた「見出し語」には、語頭に「†」を付した。
- 6 「Fijiri 聖」という見出し語 (土井ほか [1980: 231 r]) にも、「高野聖」に関する次のような説明文が存在する： 例, Cōyafijiri. (高野聖) 一種の籠, すなわち, 背負い籠のような物を背負って遍歴する坊主 (Bonzos).
- 7 土井ほか [1980] が同ページ中の注記で指摘しているように、「Cujigoxinbö」は「Cujigoxinbô」の誤記と考えられるが、「見出し語」なので敢えてそのままにしておいた。

- 8 土井ほか [1980]による同ページ中の注記に従い、「Xingoxùs」を「Xingōxùs」に修正した。
- 9 対応するサンスクリット語は、「Vairocana」である。真言宗で信奉されている「大日如来」、すなわち「Mahā-vairocana 大毘盧遮那」を指している可能性も存在する。ただし、華嚴宗における信奉の対象である所謂「盧舎那仏」を指す可能性もあるため、宗派を確定することは困難である。なお、華嚴宗と関連する可能性については、密教文化研究所研究会において、南昌宏氏（高野山大学教授）からご指摘いただいた。記して謝意を表します。
- 10 密教における「不動明王」を指していると判断できる。
- 11 密教における「大円鏡智、平等性智、妙觀察智、成所作智、法界体性智」という5種類の智慧を指していると推測できる。
- 12 前掲したように、「Goma 護摩」という見出し語が真言宗と関連づけられているため、「Gomadō 護摩堂」も真言宗と関連すると推定できる。
- 13 前掲したように、「Goma 護摩」という見出し語が真言宗と関連づけられているため、「Gomagui 護摩木」も真言宗と関連すると推定できる。
- 14 サンスクリット語では、「maṇḍala」と表記される。
- 15 「高野山」と「比叡山」のことを、「南山」と「北嶺」と呼称する場合もある。そのため、ここでの「Nanzan 南山」も、「高野山」を指している可能性が存在する。ただし、『日葡辞書』には、「北嶺」という見出し語は存在しない。
- 16 「顕教」と「密教」のことを意図していると推測できる。
- 17 「両界曼荼羅」とは、真言宗で重視される「金剛界曼荼羅」と「胎蔵界曼荼羅」という2種類の曼荼羅のことであり、これらの曼荼羅の中央に描かれる尊格は「大日如来」である。そのため、「両界曼荼羅」における中尊を、「金剛界大日如来」や「胎蔵界大日如来」と呼称する場合もある。さて、当該箇所では、「両界曼荼羅」に対して「男性の仏 (Fotoque) と女性の仏 (Fotoque) と」という説明がなされているが、真言宗の立場ではこれは不適切な認識と言える。おそらく、中世の日本人がイエズス会宣教師に対して「金剛界曼荼羅は男性原理を、胎蔵界曼荼羅は女性原理を、それぞれ表している」といった主旨の説明を行い、それを宣教師が「金剛界大日如来は男性の姿で、胎蔵界大日如来は女性の姿である」と誤認したのではないかと推測することができる。
- 18 土井ほか [1980]では、「さん仏」と表記されているが、「三仏」という漢字が当て嵌まると推測した。この判断が妥当であれば、「三仏」とは「法身・報身・応身としての大日如来」を意図していることになる。
- 19 『日葡辞書』には、「Dainichi 大日」という見出し語は存在しない。
- 20 ここでの「Taizōcai 胎蔵界」とは、「胎蔵界大日如来」を指していると判断することができる。詳細については、前掲した「Riōgai 両界」に対する注記を参照されたい。
- 21 真言宗では、「檜」は蓮華の代用品などとして広く用いられている。なお、本稿の一覧表では割愛したが、「Goma 護摩」という見出し語の説明文には、次のような例文が存在する（ただし、この例文における檜に相当する原語は loureiro である）：例, Gomautaqu. (護摩を焚く) 胡麻 (Goma) の油と檜の皮などを火にくべながら、この儀式を行なう。
- 22 Text: 東京大学史料編纂所 [1990: 1–14 (no. 1)], RUIZ DE MEDINA [1990: 1–24 (no. 1)]. Tr.: 東京大学史料編纂所 [1991: 3–23 (no. 1)], 岸野 [1989: 60–76]. なお、RUIZ DE MEDINA [1990]では、当該の資料の年代が「1546/1547年」と表記されている。
- 23 Text: 東京大学史料編纂所 [1990: 23–34 (no. 6)]. Tr.: 東京大学史料編纂所 [1991: 35–53 (no. 6)], 岸野 [1989: 107–120].

- 24 Text: 東京大学史料編纂所 [1990: 35–39 (no. 7)], RUIZ DE MEDINA [1990: 69–76 (no. 9)]. Tr.: 東京大学史料編纂所 [1991: 54–61 (no. 7)], 岸野 [1989: 120–126].
- 25 Text: RUIZ DE MEDINA [1990: 44–69 (no. 8)]. Tr.: 岸野 [1989: 142–158].
- 26 Text: 東京大学史料編纂所 [1990: 95–102 (no. 25)], RUIZ DE MEDINA [1990: 118–127 (no. 23)], SCHURHAMMER & WICKI [1945: 135–153 (no. 85)]. Tr.: 東京大学史料編纂所 [1991: 155–166 (no. 25)], 河野 [1985: 444–453 (no. 85)], 松田 [1997: 25–33 (no. 4)], COSTELLOE [1993: 277–282 (no. 85)].
- 27 Text: 東京大学史料編纂所 [1990: 109–137 (no. 29)], RUIZ DE MEDINA [1990: 134–170 (no. 27)], SCHURHAMMER & WICKI [1945: 166–212 (no. 90)]. Tr.: 東京大学史料編纂所 [1991: 178–223 (no. 29)], 河野 [1985: 464–502 (no. 90)], 松田 [1997: 35–60 (no. 5)], 村上・柳谷 [1968: 1–13 (no. 1)], COSTELLOE [1993: 292–313 (no. 90)].
- 28 Text: 東京大学史料編纂所 [1990: 164–172 (no. 41)], RUIZ DE MEDINA [1990: 206–218 (no. 41)]. Tr.: 東京大学史料編纂所 [1994: 7–20 (no. 41)], 松田 [1997: 71–79 (no. 8)], 村上・柳谷 [1968: 19–25 (no. 4)].
- 29 Text: 東京大学史料編纂所 [2011: 28–67 (no. 106)], RUIZ DE MEDINA [1990: 674–717 (no. 127)]. Tr.: 東京大学史料編纂所 [2014: 41–93 (no. 106)], 松田 [1997: 247–271 (no. 26)], 村上・柳谷 [1968: 119–144 (no. 18)]. なお、村上・柳谷 [1968] では、当該の資料の送付日が「10月28日」と、宛先が「インドおよびヨーロッパのイエズス会員」と表記されているが、内容は同じである。
- 30 Text: 東京大学史料編纂所 [2011: 90–101 (no. 111)], RUIZ DE MEDINA [1990: 652–667 (no. 124)]. Tr.: 東京大学史料編纂所 [2014: 127–142 (no. 111)]. なお、RUIZ DE MEDINA [1990] では、当該の資料の年代が「1556年」と表記されている。
- 31 Text: 東京大学史料編纂所 [2018: (10)–(20) (no. 131)], RUIZ DE MEDINA [1995: 263–278 (no. 27)]. Tr.: 東京大学史料編纂所 [2018: 14–28 (no. 131)], 松田 [1997: 315–323 (no. 33)]. なお、松田 [1997] では、当該の資料の宛先が「豊後のイエズス会員」となっており、内容構成も相違している。
- 32 Text: 東京大学史料編纂所 [2018: (72)–(90) (no. 145)], RUIZ DE MEDINA [1995: 336–361 (no. 42)]. Tr.: 東京大学史料編纂所 [2018: 112–144 (no. 145)], 松田 [1997: 391–406 (no. 38)]. なお、松田 [1997] では、当該の資料の宛先が「インドのイエズス会員」となっているが、内容は同じである。
- 33 Text: 東京大学史料編纂所 [2018: (125)–(138) (no. 148)], RUIZ DE MEDINA [1995: 445–461 (no. 46)]. Tr.: 東京大学史料編纂所 [2018: 198–218 (no. 148)], 松田 [1997: 335–346 (no. 35)], 村上・柳谷 [1968: 224–234 (no. 31)].
- 34 Text: RUIZ DE MEDINA [1995: 503–516 (no. 58)]. Tr.: 松田 [1998: 75–83 (no. 46)]. なお、松田 [1998] では、当該の資料の宛先が「イエズス会員」となっているが、内容は同じである。
- 35 Text: RUIZ DE MEDINA [1995: 533–575 (no. 60)]. Tr.: 岸野 [1998: 231–232], 松田 [1998: 39–66 (no. 43)], 村上・柳谷 [1968: 265–291 (no. 35)]. なお、岸野 [1998] は、当該の書翰全体の和訳ではなく、該当箇所のみ部分訳である。他方、松田 [1998] および村上・柳谷 [1968] は、当該の書翰全体の和訳であるが、該当箇所が欠落している。
- 36 Text: RUIZ DE MEDINA [1995: 578–620 (no. 62)]. Tr.: 松田 [1998: 9–27 (no. 41)], 村上・柳谷 [1968: 293–302 (no. 37)]. なお、村上・柳谷 [1968] では、大幅な中略が行われている。
- 37 聖パウロ学院に関する詳細については、岸野 [2001: 99–113] を参照。
- 38 Cf. 東京大学史料編纂所 [1991: 35].
- 39 ガルシア・デ・サーに関する詳細については、岸野 [1998: 104–105] を参照。
- 40 原文に関しては、筆者は未見である。なお、岸野 [1989: 142–158] に全体の和訳が掲載されている。
- 41 岸野 [1989] の巻末には、【2】【3】【4】の写本の影印が掲載されている。なお、「第一情報第二稿」に関しては、同書に影印やテキストが掲載されていないため、和訳のみを参照した。

- 42 本稿における「東大本」という略称は、東京大学史料編纂所 編纂『日本関係海外史料 イエズス会日本書翰集』（[1990]～[2018]）を指している。
- 43 本稿で扱う Text には、ポルトガル語（Português. 以下、Prt.）とスペイン語（Español. 以下、Esp.）とが存在するため、引用箇所ごとにその旨を明記した。また、紙幅の都合上、校訂本における異読情報に関しては、すべて割愛した。他方、Tr. に関しては、【13】【14】【15】を除いて、東京大学史料編纂所 [1991] [1994] [2014] [2018] から引用を行った。同和訳では原語がルビとして振られているが、本稿では Text を併記しているため、ルビをすべて割愛した。これに加えて、【13】【14】【15】に関しては、Text には RUIZ DE MEDINA [1990] [1995] を用いたが、対応する和訳は他の写本・版本に基づいている場合もあり、両者の内容が必ずしも一致している訳では無い。なお、Text と Tr. における下線は、筆者が付記したものである。
- 44 東京大学史料編纂所 [1991] では「荒神三宝」と表記されているが、「三宝荒神」の誤記であろう。
- 45 当該の日本人の名称については、岸野 [2001: 10–14] および App [1997a: 53–54 n. 2] を参照。また、生没年については、岸野 [2001: 17, 191–197] によって考察が行われているが、確定してはいないようである。
- 46 岸野 [1989: 120 n. 46] では、当該の所作が天台宗や真言宗と関連すると指摘されているが、どちらの宗派かという確定はなされていない。
- 47 東京大学史料編纂所 [1991] における和訳と対応させるために、この位置で改行を行った。
- 48 Cf. 東京大学史料編纂所 [2018: 14].
- 49 入定信仰に関する詳細については、武内 [2008: 215–236] を参照。
- 50 来日時のザビエール一行の構成メンバーについては、岸野 [1998: 155] を参照。
- 51 Cf. 岸野 [2001: 112–113].
- 52 『日葡辞書』（土井ほか [1980]）には、前掲したように「Fudô 不動」という見出し語が存在するため、イエズス会の宣教師達は不動明王の存在を認識していたと判断することができる。ただし、同辞書には、「Nhorai 如来」（p. 461 l）、「Bosat 菩薩」（p. 62 l）、「Tenbu 天部」（p. 644 l）、「Cami 神」（p. 85 l）という見出し語は存在するが、「明王」という見出し語は存在しない。また、「Fudô 不動」の説明文には、「ある仏 (*Fotoque*) の名」と記されているのみであり、「明王」という語句は用いられていない。これらの事実は、多面多臂で忿怒相の尊格（降三世明王、大威徳明王、金剛夜叉明王など）が中心となる「明王」というカテゴリーが、キリスト教の宣教師達に「悪魔」の一種として認識されていたという筆者の推測を支持している。ただし、同辞書における「Acuma 悪魔」（p. 12 l）や、その類語である「Acqi 悪鬼」（p. 11 l）、「Tengu 天狗」（p. 645 l）という見出し語の説明文には、「明王」と関連する内容は記されていない。
- 53 聖ヨハネ騎士団は、騎士修道会の一つであり、中世における十字軍の主力を担っていた。なお、当該の書翰が執筆された 1562 年の時点では、ロドス島から撤退しており、マルタ島を本拠地としていた。現在では、ローマを本拠地として医療活動などを行っている。
- 54 Cf. 岸野 [1998: 219, 235 n. 21].
- 55 岸野 [1998: 225–229] は、「マテリア・プリマ」が仏教における「大日如来」や「無」に当て嵌められている用例を整理した上で、そのような考えが成立した時期は 1560 年代初頭であると結論づけている。
- 56 アルヴァレスに関する詳細については、岸野 [1989: 46–60] を参照。
- 57 東京大学史料編纂所 [2000] 所収の正誤表に従い、「最多角念珠」を「苛高念珠」に修正した。
- 58 東京大学史料編纂所 [1994] における和訳と対応させるために、この位置で改行を行った。
- 59 Cf. 岸野 [1998: 213].

- 60 Cf. 東京大学史料編纂所 [2014: 133] (下線部の箇所は、筆者が補った文字である): アミダとは何者かと尋ねると、ある王の息子であり、ある女と結婚して三年共に暮らし、二人の子を儲けたという。一人はカノン (○観音。) と呼ばれ、ある者達は、それは太陽であるという。そしてもう一人はセス (○勢至。) と呼ばれ、ある者達は、それは月であるという。
- 61 Cf. 松田 [1998: 24]: 彼らの言によれば、この阿弥陀は東方の或る国の王子で、妻を娶り、二人の子があったが、妻が死んだので彼は多くの苦行に従い、子供らは母の骨を聖宝となした。[...] さらに、彼女に菓の神になる特権を与え、二人の子については、一方を太陽、また他方を月であるとして、彼らの名を称えて救いを求める者は救われると公言した。
- 62 『日葡辞書』(土井ほか [1980]) には、「天照大神」という見出し語は存在しない。ただし、同辞書における「Amano yuato 天の岩戸」(p. 22 r) や「Fôqen 宝剣」(p. 262 l) という見出し語の説明文に、「Tenxôdaijin 天照大神」という語句が用いられている。そのため、当該の神の存在については、イエズス会宣教師に認識されていたと判断することができる。なお、「Amateraxi 天照らし」(p. 23 l) という動詞の活用形として「Amaterasu 天照らす」という用例が存在するが、本件とは直接的には関係していない。
- 63 月に対する崇拜と「月輪観」が関連する可能性については、密教文化研究所研究会において、南昌宏氏 (高野山大学教授) からご指摘いただいた。記して謝意を表します。
- 64 『日葡辞書』(土井ほか [1980]) には、「月読尊」や「月輪観」という見出し語は存在しない。なお、同辞書には「Guachirin 月輪」(p. 313 r) という見出し語は存在するが、真言宗と関連する内容は記されていない。

(本稿を執筆するにあたり、佐藤隆彦 (高野山大学教授)、南昌宏 (高野山大学教授)、Thierry J. Robouam (上智大学元教授)、菊谷竜太 (京都大学白眉センター特定准教授) の諸先生にご教示を頂いた。ここに謝意を表する次第である。)

(本研究は、令和元年度中野義照博士奨学金による研究成果の一部である。)

キーワード : 真言宗 イエズス会宣教師 『日葡辞書』 フランシスコ・ザビエル